

いわみ じょうあと 石見城跡 (第5次)

調査期間：令和7年4月14日(月)～ 5月8日(木)

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 石見城跡とは…

石見城跡は、京都市西京区大原野石見町に広がる周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)です。善峰川の南岸にあたるこの地域では、弥生時代から人々が集落を作り、暮らしてきました。また古墳時代中期(5世紀頃)に築かれた前方後円墳もあり(芝1号墳など)、有力な首長が存在したことがわかっています。

室町時代(14世紀後半～16世紀)、この地域は広く「西岡」と呼ばれ、複数の小領主が連帯して治める地域となりました。彼らは室町幕府の側近と強く結びつくことにより勢力を強めていったと見られています。小領主たちはそれぞれが治める地域に城や館を築きましたが、石見城(館)もそのひとつと考えられています。

応仁元年(1467)、京を揺るがす大戦争である応仁(・文明)の乱が始まると、西岡の領主たちは細川勝元が率いる東軍に属して戦いました。しかし、その中から西軍へ味方する武将が現れたため、一帯は激しい戦火にまつまれました。

文献史料によると、石見城(館)は文明2年(1470)に寺戸城主であった野田泰忠の攻撃を受け、善峰川の対岸にあった上里城とともに焼失しました。以後、石見城の記録は途絶えてしまい、その存在は謎に包まれたままとなりました。

2 これまでの調査成果

平成16年、都市計画道路中山石見線の建設に先立つ発掘調査が行われ、鎌倉時代～室町時代(12～16世紀)の建物跡が多数発見されました。このうち室町時代前半(14～15世紀)の建物の主軸が、東側の段丘崖上に

ある高まりや窪みの方向とそろうことから、この一帯にとるい土塁や堀をもつ城が存在した可能性が示されました。

令和3年、京都市はこの跡の性格を明らかにするため、5ヵ年にわたる範囲確認調査を計画し、着手しました(第1～第5次)。第1次調査・第2次調査では、現在地表面に残る凹凸の構造を探りました。その結果、これらが14世紀頃に構築された堀や土塁の痕跡であることが明らかとなりました。これにより、この遺跡が室町時代に存在した石見城である可能性が極めて高くなりました。

続く第3次調査では、石見城跡の範囲を確認するため、土塁の外側(北側・西側)に調査区を設けました。北西では人頭大の石を並べた石塁(13世紀)を、北側では土塁の裾をめぐる溝(外堀)を発見しました。また西側では建物跡を複数確認しました。

第4次調査では、土塁と堀に囲まれた城館の中心部を調査し、建物跡や溝、土坑等を複数検出しました。遺構の重なりから3時期の変遷が想定でき、特に14世紀末～15世紀前半頃に、城を拡張するような大規模な改造がなされたことがわかりました。

3 今回の発掘調査成果

第5次(最終年度)となる今回の調査では、石見城跡の東側と南側の範囲を確認するため、4箇所に調査区を設定しました。

5-1区 5-1区は、段丘外の北東に設定しました。外堀の検出を予想しましたが、水田化と河川による削平のため、明確な遺構を確認することができませんでした。水田の形成時期は不明ですが、第3次調査の成果より、室町時代以前にさかのぼると推定されます。

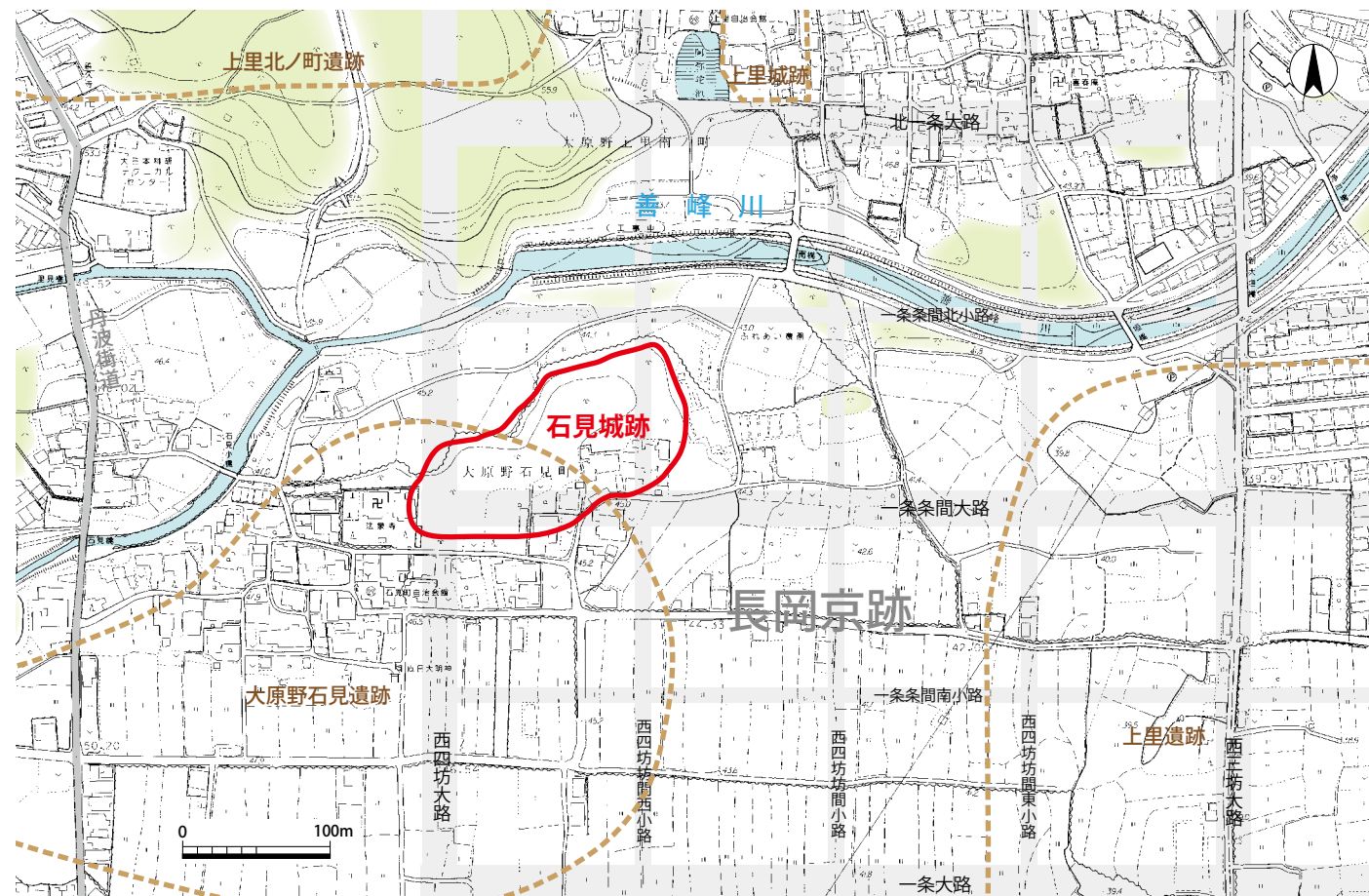


図1 遺跡位置図



図2 西京区及び周辺市町の主な城跡

石見城・西岡衆 関連年表

- | | |
|-------------|---------------------------------|
| 1336 (建武3) | 西岡衆、足利尊氏軍に味方。以後、室町幕府の被官衆となる。 |
| 1467 (応仁元) | 応仁・文明の乱勃発。東軍に所属。 |
| 1469 (応仁3) | 西軍、西岡を制圧。西軍に所属。 |
| 1470 (文明2) | 東軍の野田泰忠、上里・石見・井内館を焼く。『野田泰忠軍忠状』 |
| 1477 (文明9) | 応仁・文明の乱、終息。 |
| 1482 (文明13) | 久我荘の一部を石見小野氏が押領。『久我家文書』 |
| 1485 (文明17) | 西岡土一揆が東寺に乱入。山城国一揆が起こる。『東寺百合文書』 |
| 1487 (長享元) | 西岡衆連署状に「小野太郎左衛門尉仲重」が署名。『東寺百合文書』 |
| 1553 (天文22) | 三好長慶、畿内を制圧。 |
| 1568 (永禄11) | 織田信長、入京。西岡所々を焼く。 |
| 1573 (天正元) | 西岡灰方の下司「小野次郎左衛門」が記される。『遠山家文書』 |

5-2A・B区 5-2区は段丘外の東に設定しました。5-2A区は耕作による削平を受けており、表土を除去した段階で中世遺構面（13世紀）に達しました。

調査区の東端では、東へ下がる掘り込みを検出しました。念のため南側に追加調査区（5-2B区）を設けたところ、同じく東へ大きく下がる掘り込みを確認しました。これらの掘り込みはつながり、南北方向にのびる堀状の遺構となります（溝4201）。溝内からは、瓦器碗や青白磁など鎌倉時代の遺物が出土しました。

5-3区 5-3区は、遺跡範囲の南側に設定しました。5-2区同様、耕作による削平を受けており、近現代の床土を除去した段階で中世遺構面（13世紀）に達しました。遺構面では、ほぼ南北方向に並ぶ柱列のほか、複数のピットを検出しました。遺構内からは、瓦器碗や白磁碗がまとめて出土しました。

遺構面の基盤層は古墳時代の包含層を覆う砂礫層で、中世のピットはこれを切って成立しています。このため、長岡京期～平安時代に大規模な洪水が起こったことがわかります。



図3 5-1区遺構面全景（東から）

5-4区 5-4区は、遺跡の南に設定しました。ここでは、南北にのびる室町時代の堀状遺構（溝5411）と礫を敷いた集石遺構を確認しました。溝5411は、幅3.8m、深さ1.5mを測る大規模な遺構で、調査区の北端で東へ折れる様相を見せます。現在の石見町集落の居住域を囲む里道や水路と重なることから、城と村、あるいは村の内外を分ける堀であった可能性があります。溝5411の埋土からは、14世紀の青磁碗が出土しました。

4 おわりに

5年にわたる石見城跡の調査では、これまで謎とされてきた石見城跡の実在を決定づける成果を得ました。現在も地表面に残る凹凸は、西岡地域におこった動乱の歴史をとどめていると言えるでしょう。

なお、一連の調査成果は、総括報告書としてまとめ、今年度末に刊行する予定です。

（黒須亜希子）



図4 5-2A・B区遺構面全景（西から）



図5 5-3区全景（南から）



図6 5-4区北半部堀5411断割り状況（南東から）

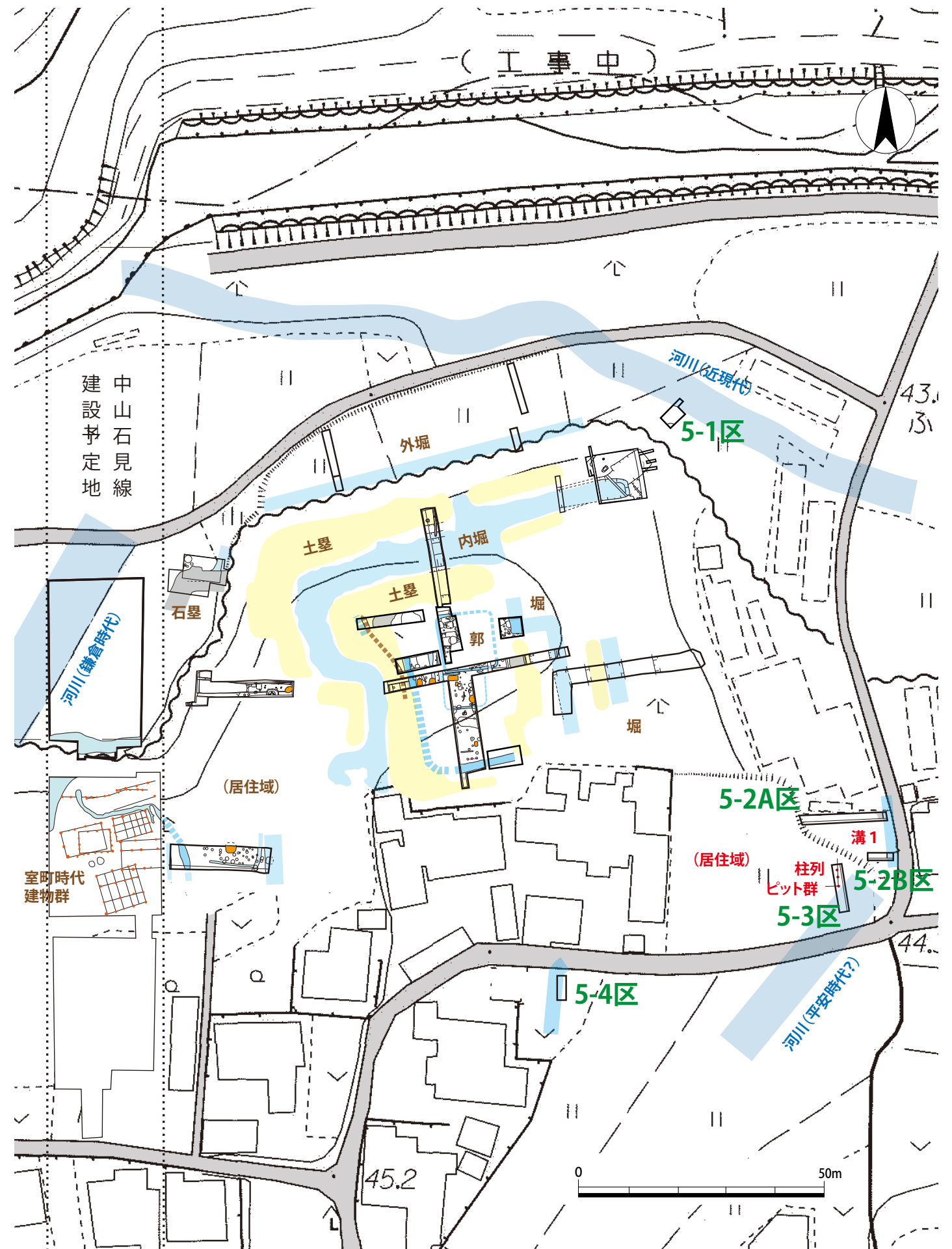


図7 石見城跡検出遺構概略図